

246
207

能樂評論
全

075048-000-6

246-207

能樂評論

高木 半/著

M43

CEL-0996



能樂評論

能樂評論

蓼田高木 半述

明治 43. 6. 30

府立

能樂者南^ナ北^{ホク}朝^{テウ}平和^{ヘイ}後^ゴ應^{オウ}永^{エイ}ノ頃^{キョウ}觀^{カン}世^セ氏^シノ祖^ソ結^{ケツ}崎^{サキ}清^{セイ}次^ジ春^{チュウ}日^{ニチ}ノ社^{シャ}人^{ジン}

ナ^ナ變^{ヘン}シ^シ猿^猿樂^樂ト^ト稱^稱シ^シテ^テ作^作ラ^ラシ^シメ^メ今^今春^春氏^氏ノ^ノ祖^祖氏^氏信^信之^之ヲ^ヲ助^助ク^ク謳^謳

歌^歌ハ^ハ多^多ク^ク俗^俗也^也實^實生^生金^金剛^剛喜^喜多^多ノ^ノ諸^諸氏^氏ハ^ハ兩^兩家^家ノ^ノ

支^支流^流也^也能^能樂^樂ノ^ノ聲^聲音^音殺^殺氣^氣ヲ^ヲ帶^帶フ^フト^ト雖^雖清^清朗^朗ニ^ニシ^シテ^テ淫^淫聲^聲無^無ク

シ^シテ^テ優^優美^美ナル^{ナル}樂^樂ナ^ナリ^リ凡^凡俗^俗ノ^ノ爲^爲フ^フサ^サニ^ニ非^非ス^ス絶^絶妙^妙感^感ス^スル^ルニ^ニ堪^堪ヘ

タ^タレ^レト^トモ^モ惜^惜ラ^ラク^クハ^ハ謳^謳歌^歌ノ^ノ文^文詞^詞顛^顛倒^倒誤^誤謬^謬アリ^リテ^テ甚^甚拙^拙ク^ク佛^佛意^意ヲ^ヲ以^以因^因

果^果應^應報^報シ^シ主^主ト^トシ^シ多^多ハ^ハ亡^亡靈^靈冥^冥土^土ノ^ノ苦^苦ヲ^ヲ訴^訴ル^ル曲^曲ニ^ニテ^テ忠^忠孝^孝貞^貞節^節ノ^ノ者^者ノ

曲^曲少^少ク^ク中^中ニ^ニハ^ハ忠^忠孝^孝ノ^ノ者^者ノ^ノ曲^曲アリ^リト^ト雖^雖其^其言^言擧^擧ケ^ケ足^足ラ^ラサル^ルコ^コト^ト多^多シ

然^然ノ^ノミ^ミナ^ナラ^ラス^ス神^神ニ^ニ三^三熱^熱ノ^ノ苦^苦有^有リ^リ或^或ハ^ハ神^神カ^カ罪^罪ヲ^ヲ助^助ケ^ケユ^ユト^ト請^請ナ^ナド^ドノ

語^語有^有リ^リテ^テ神^神ヲ^ヲ汚^汚シ^シ蟬^蟬丸^丸ノ^ノ盲^盲者^者逆^逆髮^髮ノ^ノ狂^狂女^女ヲ^ヲ皇^皇子^子ナ^ナト^ト云^云ヒ^ヒ延^延喜

帝ヲ不仁ニ爲シ又ハ皇后カ賤者ノ亡靈ニ苦シメラレ給フナトノ
曲有リ源ノ賴政ハ高倉ノ宮ニ勤王ノ軍ヲ起サセ奉リシヲヨシナ
キ御謀反ヲ勸メ奉リシナト、勤王ノ者ヲ謀反人ニシ源ノ義經ハ
勳臣ナルニ修羅道ニ苦ムナト、云ヒ日本ヲ粟散邊地ノ小國又唐
ニ比スレハ九牛カ一毛ナト、云語有リテ日本ヲ賤シミ敬神尊
王愛國ノ意ニ背キ亡國ノ音トナリテ外國人ニ觀覽サスルモ恥ツ
レハ神社ノ祭祀貴族ノ祝賀ニ奏スルニ宜シカラサル也考ルニ恐
多クモ後醍醐天皇重祚ノ際功臣ノ褒賞ヲ謬リ給ヒシ瑕釁ニ乘シ
足利尊氏叛テ政權ヲ奪ヒ遂ニ霸者ト成リタレハ其時ノ國學者儒
學者正義ノ徒ナレハ勤王家ニ從軍シ戰死セルヲ以學者乏ク成リ
文運衰微セリ幸ニ生存シ居ル者モ有レトモ足利氏ノ非ヲ論スレ
ハ義滿之ヲ用ヒス佛道ニ歸依シテ我罪ヲ滅セント欲シ僧ヲ愛シ
テ謳歌ノ文詞ヲ多クハ僧徒ニ作ラシメタル物ト察セラル斯ク時

勢ヲ以作リシ物ナレハ皇國ノ國體ニ戾リ文詞モ拙ケレハ方今文
明ノ盛世ニ於テ改正セサルヘカラズ足利氏モ南北朝平和後猿樂
ヲ改正シタリ况方今維新ノ世ニ於テヤ從前ノ能樂神祇ノ曲ハ
神佛混淆ノ物他ノ曲ハ亡靈ノ物ヲ除キ可ナル物ヲ撰ミ文詞ヲ改
正シ又更ニ仁君忠臣節婦孝子ノ事蹟ヲ發揚シ敬神尊皇愛國ヲ主
トシ勸善懲惡ト成ル可キ善美ノ新能樂ヲ起シ神祭祝賀ニ奏セハ
移風易俗ノ一端トモナリ國ノ光榮トナリナン能樂師ヲ始メ同志
ノ諸君協力シテ能樂ヲ改正シ善美ナル新能樂ヲ作ラレン事ヲ祈
望セリ從前ノ能樂シテノ發端ノ出一聲サシ下歌上歌等ノ行歌冗
長ノ物ハ觀客倦ヲ生スレハ冗長ナラザル様成可ク短ヲ要ス然ル
ニ從前ノ能樂謳歌ノ文詞俗語モ交リ有レトモ名文ナレハ改正ス
ヘカラスト論スル人有レト俗語タリトモ文詞顛倒誤謬有リテハ
名文ト云難シ余能樂改正ニ熱心ナレハ拙劣ヲ顧ス評論セリ

稱號

猿樂ハ原亂舞或散樂ト稱セシカ散樂ヲ誤リテ猿樂ト稱セシト云
說モ有レトモ按スルニ猿女ノ能ト稱センカ爲猿樂ト改稱セシナ
ラト思ル也

能樂之稱號ハ原猿樂之能ナリシカ近世只能ト稱シ來レルヲ明治
十三年余東京ニ抵リテ觀世清孝師ニ能ヲ能樂ト稱シ改正爲レン
事ヲ勸メシカハ師賛成シテ已後能樂ト稱セント言レシカ其後日
ナラスシテ朝廷ヨリ芝公園ニ能樂堂ヲ起サレ能ヲ能樂ト稱スル
事ニナリ余カ清孝師ニ勸メシニ符合セリ能之字ハ廣韻ニ善也多
藝ナリ一ニ曰ク凡才力有ル者ヲ稱シテ皆能ト曰トアレハ樂能ノ
稱號然ル可キ也
能樂之歌ヲ古來或謳或諷或謠ト書有リテ各うたひト唱來リ近來
謠曲ト稱スレトモ謠ハ說文ニ徒歌也トアリ又詩ノ魏風ノ傳ニ曲

樂ニ合テ歌ト曰ヒ徒歌ヲ謠ト曰フトアリテ謠ハ童謠田歌ナトナ
云ヘリ能樂ノ鼓舞スル歌ニハ適セサルナリ
諷ハ集韻ニ諫刺也トアリテ諷諫ノ歌ニシテ是亦適セス
謳ハ說文ニ齊歌也正字通ニ謳ハ歌ノ別調爲リ歌ハ謳ノ總名爲リ
トアリ又歌謳ノ語アリテ歌ト同字義ナレハ謳字名稱ニ適セリ

藝名

秦曲正名闕言ニ藝名及曲名ヲ正字ニ
記セルヲ以テ記ス

シテ正生
ワキ末生
ツレ副生
アヒガタリ
淨

曲名

シダイ 序歌
秦曲闕言ニ次第ト記シ有レモ當ラス序歌然ルヘシ

コトバ 白章
ナノリ 名稱
ミナユキ 仰行

イツセイ 一聲
サシ 起端
サケウタ 低歌

アケウタ 高歌
カ、ル 入
ク 復更

六 聲 半打節 六字不足ノ句トルトモ云

ヤ 三 聲 餘 小打節

ヤア ユ ぬ ふ な み の み き は な る ウ あ ま の

能樂ハ斯ノ如ク十二聲ヲ以一句トシ八ノ拍子ニ合ヘリ雅樂ハ笛ノ聲音十二聲ヲ以十二律トシ十二月ニ配セリ西洋ハ四ノ拍子ヲ打テ舞蹈セリ即能樂八拍子也何レモ天理自然ノ節奏ニテ能樂ノ歌調優美ニ鼓吹巧妙ナレハ歌詞ヲ改良スレハ外國ノ樂ニ豈恥可ケンヤ

翁 舞 歌ヲ神歌ト云

翁舞ハ猿樂ナリト云催馬樂之總角ノ歌ヲ基トナシテ作りタルト見ヘタリ
總角ノ歌 總角やとうとう尋ばかりやとうとう離りて寝たれ

とモ轉び逢たりとうとう 評とうとうハ嘸子ノ詞也和名抄ニ總角ハ結髪也ト有テ童子ノ髪ノ長成テ肩ニ及フヲ擧テ卷タルヲ總角ト云コトニ總角トイヘルハ童子ヲ云也尋ハ周注疏ニ八尺ヲ尋ト曰ト有リ日本ニテハ四尺ヲ尋ト曰フ童子一尋ハカリ離レテ寝タレトモ轉ヒアヒタリト云意也
翁とうとうたりたりたりたりあがりらゝりとう
評ハヤシノ詞也

地ちりやたりたりたりあがりらゝりとう
評ハヤシノ詞也
翁所千代迄おはしませ 評君ハ千代迄おはしませノ誤也
地我等ハ千秋さふらふ 翁鶴と龜との齡にて 地幸心に任せたり
評意通ゼス改幸身にうけたりトセハ可ナラン
翁とうとうたりたりたりら 地ちりやたりたりたりら

かりらゝりたう 千歳鳴ハ瀧の水。日は照とも 地絶す
たうたり。ありうとうとう 千歳絶す滔たり常にたり

評鳴は瀧の水日は照ともハ延年ノ舞ノ歌ナレトモ意通セス

千歳君の千歳をへん事も。天津乙女の羽衣よ。鳴は瀧の水日照とも
地絶すたうたり。ありうたうたうたう 評君の千歳を云々拾遺

集の讀人不知ノ歌ニ 君が世は天の羽衣稀にきてなづとも盡ぬ
巖なるらんト有ルナトリテ云へるナレトモ詞足ラスシテ意通
セス

翁總角やとんとや 地尋はかりやとんとや 翁やあ坐して居たれ
とも參ふれんげりやとんとや

評とんとやハとうとうノ誤リナラン總角や云々詞通セス

翁千早振。神のひこさの昔より。久しかれとを祝ひ 地をよやりちや
評意通セス

翁凡千年の鶴は萬歳樂とたり 評以下皆文詞調ハス意通セス翁
ハ世ヲ祝シ祈禱ノ樂ト云ヘトモ世ヲ祝シ祈禱ノ詞足ラス神前
及貴人ノ前ニテ奏ス可キ樂ニアラス
余拙劣ヲ顧ス翁舞ノ詞調ニ倣ヒ古語ヲ集テ千秋舞ト稱シ改正
ノ翁舞ヲ作レリ舞法鼓吹皆翁舞ニ擬フ新能樂謳歌本ニ見ハス
ヲ以爰ニ贅セス

高砂

次第今を始の旅衣く日も行末を久しき 評日ハ衣ノ紐ニカケ
云ヘルナリ行末を久しきトハ滞留ノ長キヲ久シキトハ云ヘト
道ノ遠キヲ久シキトハ云可カラス 改立行道を遙けきトセハ
可ナラン

ワキ詞抑是は 評抑ハ前ニ事云テ又更ニ云所ノ發語ニテ扱マア又
タムシト云意ニ用ルナリ次第有レドモ此所ニハ用ユ可カラス

是ハ他ナサシテ云詞ニテ自指テ云詞ニ非ス自ハ我ト云可シ抑
是ハノ詞無テ然ル可シ

九州肥後の國阿蘇の宮神主友成とは我事也 評我事也トハ叮嚀

●過レハ除テ然ル可シ 改九州肥後の國阿蘇の宮の神主友成
也トシテ可ナラン

我未都を見ず候程に。此度思ひ立都に登り候。又よき次なれば播州
高砂の浦をも一見せばやと存候 評此詞ニテハ最早都へ登り居

リ歸路ニ高砂へ立寄ヲハヤト思フト聞ユル也道行ノ詞ハ未都
ハ登ラヌ前ノ詞也 改我未都を見ず候程に此度思ひ立播州高

砂の浦を一見し都へ上らばやと思ひ候トセハ可ナラン
道行 旅衣末途々の都路をく 今日思ひ立つ浦の浪。船路長閑き春

風の幾日来ぬらん跡末もいさ白雲の遙々と。御しも思ひし播磨の
た高砂の浦に。着にけりく 評旅夜重複末途々意通セス都

路を今日思ひたつトノ詞都ヲ立ニ聞エ都へ行ニ聞エズ春風の
幾日来ぬらん跡末も語ヲ成サス意通セズ 改荒墟之。墟の八百
路をはるばると。く。思ひ立ぬる浦の浪。船路長閑き春風に。幾日
来つらん白雲の。よそにも見ぬし播磨のた高砂の浦に。着にけり

一聲 二人高砂の。松の春風吹暮て。尾上の鐘も響くなり 評尾上ノ

鐘も響く也上ケハト重複ナレハ高砂のヨリ 改一しほの縁を
添へて高砂の松は老木も春を知るトセハ可ナラン此歌嘉元百

首頓覺ノ歌也トシ知りけるトアルヲ略セリ
二句 ヲ波は霞の磯ぐくれ 二人音こそ盪の満干なれ 評意通セ

ス 改浦は霞の立こめて。磯うつ波の。音のみそきくトセハ可ナ
ラン

サシシテ誰をかも知人にせん高砂の松も昔の友ならで過こし世

々は白雪の積り積りて老の鶴のぬぐらに残る有明の春の霜夜の
起居にも松風をのみ聞馴て心を友と菅菴の思を述る計也 評白
雪の積り積りて老の鶴の詞通セス又ぬぐらに残る有明の何カ
残ルカ通セス 改誰をか知る人にせん高砂の松も昔の友な
らで過こし世々は白雪の頭に積り老か寢覺に松風をのみ友と
管菴の思を述る計りなりトセハ可ナラン

下歌 音信は松にこと問ふ浦風の落葉衣の袖添へて木陰の塵を搔
ふよく 評浦風の落葉衣と云ては意通セス 改浦風に落葉衣

云々トセハ可ナラン

上歌 所ハ高砂のく尾上の松も年ふりて 改尾上の松と年古り
てトセハ可ナラン

老の波もよりくるや木の下陰の落葉搔なる迄命長へて猶いつ迄
かいきの松夫も久しき名所哉く 評落葉ハ老若トモ搔ニ落葉

搔なる迄命なからへてト云如何 改落葉かきつゝ命なからへ
てトセハ可ナラン

ワキ詞里人を相待所に老人夫歸來れりいかは是成老人に尋ぬ可き
事の候 評如何トハドウシヤト云詞ニテ發語に非ズ如何ニノ詞
省テ然ル可シ 改是なる老人に尋ぬ事有りトセハ可ナラン
シテ詞こなたの事にて候か何事にて候ぞ ワキ高砂の松とは何れの
木なるぞニテ可ナラン

シテ 唯今木陰を清め候こそ高砂の松にて候へ ワキ高砂住の江の
松に相生の名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに。何とて相生の
松とは申候ぞ シテ仰の如く古今の序に。高砂住吉の江の松も。相生
の様に覺江とあり去ながら。此尉は津の國住吉の者。是成姥こそ當
所の人なれ。知る事あらば申さ給へ 評相生は相老ナルヲ中古ノ
歌人相生と誤レルヲ以能樂ニ相生と作レルナレハ相老と改ム

ヘシ高砂住ノ江ノ松ノ精靈夫婦ノ翁嫗ニ化出タルハ無キ事ニ
テ能樂ノ作り物語ナレ共夫婦の翁嫗共ニ生レタルト云ヨリ共
ニ老タルト云方宜シカルヘシ仰ノ如クノ詞穩ナラス能樂ニ老
人ヲ尉ト云ヘト老人ヲ尉ト云ヘルヲ和文ノ諸書ニモ謠曲ノ諸
註ニモ見エス何ヲ以云ヘルカ解セサレハ翁ト云カ然ル可シ
住ノ江ノ松ヲ姫松ト云ヘハ高砂ノ松ヲ翁トシ住吉ノ松ヲ嫗ト
スルカ然ル可カラシ

仰の如く云々改テこは古今集の序ニ。高砂住の江の松も。相老の
様に覺江とあれば相老の松と申也然るに此翁は此高砂の者。彼
嫗は津の國住吉の者にて候トセハ可ナラン

ワキ ふしきやみれは老人の夫婦一所に有なから遠き住の江高砂
の浦山國を隔て住むと云は如何なる事やらん ヲレうたての仰候
や山川萬里を隔つれとも 評萬里は餘り遠過れば改遠き山川を

隔つれともトセハ可ナラン

たかひる通ふ心つかひの妹背の道は遠からず ヲレ先按しても御
覽せよ 二人高砂住の江の松は非情の物たるも相老の名は有そか
し。ましてや生ある人として年久しくも住吉より通ひ馴たる尉と
姥は松諸共に此年まで相生の夫婦となる物を 評ましてや云々
ノ詞穩ナラス改まして生る人とし年久しくも住吉より通ひ馴
たる物にして松諸共に年をへて相老の夫婦なる物也トセハ可
ナラン

ワキ 謂を聞けば面白や扱々先に聞へつる相生の松の物語を所に
いひ置いはれは無きか ヲレ昔の人の申しは是はめでたき世の例
なり ヲレ高砂と云は上代の万葉集のいにしへの義 ヲレ住吉と申
は今此御代に住給ふ延喜の御事 ヲレ松とは盡ぬ言の葉の ヲレ榮
へは古今相同しの 二人御代をあがむるたとへ也 ヲレ能々聞けハ

有難や 評高砂と云は上代の。万葉集の古昔イムシノの義。住吉と申は。今此御世に住給ふ延喜の御事ト云事。因リトコロ無シ。扱々ヨリ能々聞けは有難迄削リテ可ナラン

ワキ 今こそ不審春の日の シテ光りやはらぐ西の海の ワキかしこは住の江 シテ爰アハは高砂 ワキ松も色添ツひ シテ春も ワキ長閑に改ウツワキ松の色添ツひ シテ春も ワキ長なるトセハ可ナラン

上歌同四海浪静にて。國も治まる時津風。枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の松こそめてたかりけれ。實や仰きても。ことも愚やかゝる世に。住める民として豊なる。君の恵と有難き。く 評四海波云々詞調ハス 改上歌同四海浪静にて。國安らけき時津風。枝をならさて相老の。松もろともに年をへて。榮へ久しきいかし世に。豊に住める我らこそ。實大君の恵なれ。く トセハ可ナラン ワキ詞猶々高砂の松の目出度謂委御物語候へ 誇地夫艸木心なし

と申せとも。花實の時をたかへず。陽春の徳をそなへて。南枝花始て開く 評草木の花は春のみならず。四季に開けば。陽春云々 改四の時に徳を以て各花開けりトセハ可ナラン

サシ 然れ共此松は。其氣色とこしなへにして花葉時をわかず 同四の時至りても。一千年の色雪とうちに深く。又は松花の色十かへり共いへり シテかゝるたよりを松か枝の 評然れ共より松か枝迄の詞調はず 改然るに松の葉は。緑の色とこしなへにして時をわかず。歳寒き雪のうちにもかはらじのトセハ可ナラン。通茂の歌に。行末の秋風いかにかはらじの。言の葉艸の露の契りもトアレハ。斯く云ハ。續キヨカル可シ

言の葉艸の露の玉。心のみかく種となりて シテ生とし生る物毎に。敷島の陰によるとかや 評陰を道に改ハ可ナラン クセ 然るに 改抑トセハ可ナラン

長能の言葉に、評長能ナガたふトヨム可シ

有情非情の其聲。皆歌にも、事なし。草木土砂。風聲水音迄萬物の
こもる心有り。評草木土砂云々通セス省キテ可ナラン

春の林の。東風に動き秋の蟲の。北露に鳴き皆和歌の姿ならずや
評姿ならずや穩ナラス。改心ならずやトスル可ナラン

中にも此松は已後其名を名乗給へや迄中略。二人今は何をかつ、
むへき。是は高砂住の江の。相生の松の精。夫婦と現じ來りたり。評

生老に改現しナあらはれニ改ム可シ
地ふしきや扱は名所の。松の奇特を顯はして。評是迄歌ノ徳ヲ述

シ事ヲ云はずは結付カズ。改ふしぎや扱は松の精。歌の徳を述
給ふトセハ可ナラン

草木心なけれともヨリいてにけりや乞中略。評けりや々の詞無
キ方可ナラン

ワキ上歌 高砂や。此浦舟に帆をあげて。評改高砂の。浦はの舟に帆あけ
てニスルカ可ナラン

月諸共に出鹽の。波の淡路の島陰や。評やナもニ改カ可ナラン
遠く鳴尾のヨリ西の海迄中略

櫓の原の浪まより。評ト部兼直ノ歌ニ西の海や櫓の原の鹽路よ
り顯れ出し住吉の神ト有ナトリタルナル可シ浪まより本歌の
通り鹽路トスルカ可ナラン

顯れ出しヨリ還城樂の舞迄中略
地御て万歳の。小忌衣。同さすかいなには。評万歳樂重複ナ

レハ。改御代は手長に千秋樂年は豊かに秋風樂とセハ可ナラ
ン

惡魔を拂ひ。おさむる手には。壽福をいだし。評此句面白カラネハ
省ガ可ナラン

有難や 評高砂と云は上代の。万葉集の古昔コトノの義。住吉と申は。今此御世に住給ふ延喜の御事ト云事。因リトコロ無シ。扱々ヨリ能々聞けは有難迄削リテ可ナラン

ワキ 今こそ不審春の日の シテ光りやはらぐ西の海の ワキかしこは住の江 シテ爰アハは高砂 ワキ松も色添ソひ シテ春も ワキ長閑に改カワキ松の色添ソひ シテ春も ワキ長なるトセハ可ナラン

上歌同四海浪静にて。國も治まる時津風。枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の松こそめてたかりけれ。實や仰きても。ことも愚やかゝる世に。住める民として豊なる。君の恵そ有難き。〜 評四海波云々詞調ハス 改上歌同四海浪静にて。國安らけき時津風。枝をならさて相老の。松もろともに年をへて。榮へ久しきいかし世に。豊に住める我らこそ。實大君の恵なれ。〜トセハ可ナラン

ワキ詞猶々高砂の松の目出度謂委御物語候へ 〱地夫艸木心なし

と申せとも。花實の時をたかへず。陽春の徳をなへて。南枝花始て開く 評草木の花は春のみならず。四季に開けは。陽春云々 改四の時に徳を以て各花開けりトセハ可ナラン

ワキ 然れ共此松は。其氣色とこしなへにして花葉時をわかず 同四の時至りても。一千年の色雪とうちに深く。又は松花の色十かへり共いへり シテかゝるたよりを松か枝の 評然れ共より松か枝迄の詞調はず 改然るに松の葉は。緑の色とこしなへにして時をわかず。歳寒き雪のうちにもかはらじのトセハ可ナラン。通茂の歌に。行末の秋風いかにかはらじの。言の葉艸の露の契りもトアレハ。斯く云ハ。續キヨカル可シ

言の葉艸の露の玉。心をかき種となりて シテ生とし生る物毎に。敷島の陰によるとかや 評陰を道に改ハ可ナラン
クセ 然るに 改抑トセハ可ナラン

長能か言葉に、評長能ナガたふトヨム可シ
有情非情●其聲。皆歌にもるゝ事なし。草木土砂。風聲水音迄萬物の
こもる心有り。評草木土砂云々通セス省キテ可ナラン
春の林の。東風に動き秋の蟲の。北露に鳴き皆和歌の姿ならずや
評姿ならずや穩ナラス。改心ならずやトスル可ナラン
中にも此松は已後其名を名乗給へや迄中略。二人今は何をかつゝ
むへき。是は高砂住の江の。相生の松の精。夫婦と現じ來りたり。評
生老に改現しナあらはれニ改ム可シ
地ふしきや扱は名所の。松の奇特を顯はして。評是迄歌ノ徳ヲ述
シ事ヲ云はずは結付カズ。改ふしぎや扱は松の精。歌の徳を述
給ふトセハ可ナラン
草木心なけれともヨリいてにけりや乞中略。評けりや々の詞無
キ方可ナラン

リキ上歌 高砂や。此浦舟に帆をあげて。評改高砂の。浦はの舟に帆あけ
てニスルカ可ナラン
月諸共に出盪の。波の淡路の島陰や。評やナもニ改カ可ナラン
遠く鳴尾のヨリ西の海迄中略
櫓か原の浪まより。評ト部兼直ノ歌ニ西の海や櫓か原の盪路よ
り顯れ出し住吉の神ト有ナトリタルナル可シ浪まより本歌の
通り盪路トスルカ可ナラン
顯れ出しヨリ還城樂の舞迄中略
地御て万歳の。小忌衣。同さすかいなには。評万歳樂重複ナ
レハ。改御代は手長に千秋樂年は豊かに秋風樂とセハ可ナラ
ン
惡魔を拂ひ。おさむる手には。壽福をいだき。評此句面白カラネハ
省ガ可ナラン

246
207

千秋樂は民を撫て。万歳樂には命をのふ。相生の松風。諷々の聲をたのしむく。 師千秋ヲ太平トシ万歳樂にはにナ省キ相生ヲ相老トシたのしむヲたのしきト改可ナラン
能樂高砂ハ歌之徳ヲ述へ祝言ノ曲ニシテ世人之ヲ賞翫セリ然ルニ詞錯亂シ文明ノ世ニ奏スル事不躰裁ナレハ斯ク訂正スト
雖歌ノ徳ヲ述ル事足ラス又夫婦ノ松ノ精住之江ニ於テ再會ヲ期シタレ共松ノ精出ス住吉ノ神靈出テ却住吉ノ神徳ヲ述ル事無ク詮ナケレハ高砂ノ曲ニ倣ヒ相老松ノ曲ヲ作レリ別本ニ梓行スレハ爰ニ贅セス

千秋樂は民を撫て、万歳樂には命をのふ相生の松風、諷々の聲をたのしむく。詠千秋ヲ太平トシ、万歳樂にはに、省キ相生ヲ相老トシ、たのしむヲたのしむト改可ナラシム。

能樂高砂ハ歌之徳ヲ述ヘ祝言ノ曲ニシテ、世人之ヲ賞悦セリ。然ルニ詞錯亂シ、文明ノ世ニ奏スル事不躰哉ナレハ、斯ク訂正スト。雖歌ノ徳ヲ述リ事足ラス、又夫婦ノ松ノ精住之江ニ於テ再會ヲ期シタレ共、松ノ精出ス住吉ノ神靈出テ却住吉ノ神徳ヲ述ル事無ク詮ナケレハ、高砂ノ曲ニ倣ヒ相老松ノ曲ヲ作レリ。別本ニ梓行スレハ爰ニ贅ヒス。

明治四十三年六月二十日出版御届

明治四十二年六月廿七日發行

大阪府下三島郡福井村百四十一番屋敷

著述者 高木 半

大阪府下三島郡茨木町五百九十五番屋敷

印刷者 岡崎 政次郎

大阪府東區心齋橋安土町北入

發行者 吉田 善之助

246
207

